

平成 30 年 9 月 11 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370723

研究課題名(和文) 外国語活動におけるCLILを活用したカリキュラム及び指導者養成プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing CLIL Curriculum and CLIL teacher education program for Foreign language activities

研究代表者

山野 有紀 (Yamano, Yuki)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：10725279

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外国語活動におけるCLIL(Content and Language Integrated Learning, 内容言語統合型学習)を活用したカリキュラムと教員養成・研修プログラムの開発を目的とする。CLILは言語学習に他教科などの児童の知的年齢にあう内容を統合し、思考活動と他文化・国際理解を促し協同の学びを取り入れ、コミュニケーション能力の育成を目指す外国語教育である。本研究はそのカリキュラム開発を目的として、学習指導要領にある小学校外国語活動に基づきCLIL指導案を開発した。さらにその成果をもとに、教員養成・研修に活用し、日本の文脈にそつCLIL指導の方法を提示した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop CLIL curriculum and teacher training program in order to improve English language education at primary school in Japan. CLIL includes four important aspects, known as the 4Cs: Content (subject matter), Communication (language learned and used in the CLIL lesson), Cognition (cognitive skills), and Community/Culture (awareness toward learning community and pluricultural understanding). Based on the 4Cs perspectives, this study creates 12 CLIL lesson plans considering the course of study and Japanese educational contexts. Furthermore, this also shows the positive potentiality of CLIL application by utilising these lesson plans for teacher training program.

研究分野：英語教育学、児童英語教育、第2言語習得理論研究

キーワード：CLIL 外国語活動 小学校英語教育 教科横断型カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

2014年度に小学校外国語活動全面実施後に行われた調査結果では、小学校教員の大きな課題のひとつに「指導方法・内容」があげられている(日本英検協会英語教育研究センター, 2015)。その指導内容については、多くの研究者が、「高学年児童の興味に沿った内容」「認知発達レベルと言語レベルのギャップに考慮した授業活動」「言語理解と異文化理解のバランスの取れた指導実践」の重要性を指摘している(アレン, 2010; パトラー, 2005; 岡, 金森, 2012)。しかし、それらをどのように統合し実践するかについて、具体的指針になるものは少ない。そこで本研究は、EU 統合に伴い、より質の高い外国語教育が必須となったヨーロッパを起源に開発された CLIL を日本の小学校外国語活動に取り入れ、効果的な指導内容および指導方法の探究を行う。

CLIL とは、言語教育 (Communication) と他教科や教科横断型のテーマ学習などの学習者の知的発達や興味を鑑みた本物の内容 (Content) を統合し、思考活動 (Cognition) と協同学習・相互文化理解 (Community・Culture) を、4Cs として授業を構成する際の重要な要素として組み入れた外国語教育である (Coyle, 2007; Coyle, Hood & Marsh, 2010; 池田, 2011)。第2言語習得理論研究の観点からも、学習者の興味を喚起する意味内容での理解可能で良質なインプット、インタラクション、アウトプットは必須であり、CLIL はそれらを促す可能性があるとされている。(Coyle et al., 2010; 和泉, 2011; Graaff, Koopman, Anikina, & Westhoff, 2007)。

日本の小学校外国語教育においても、全教科を教える小学校教員の知識や児童理解をいかした他教科の内容を活用した外国語活動における指導内容および指導方法の工夫の必要性について、学習指導要領に明記されている。上記のことから、高学年児童の知的発達や興味を鑑みた授業実践のために、CLIL を取り入れた小学校外国語活動カリキュラムおよび指導者養成プログラムの開発を行うことは、今後の小学校外国語教育における効果的な「指導内容・指導方法」を考えるための一つの指針となりえらと考える。

2. 研究の目的

本研究は、小学校外国語活動のための効果的な指導方法および指導内容の探究を目指し、外国語活動に CLIL (Content and Language Integrated Learning, 内容言語統合型学習) を取り入れ、言語学習に他教科などの児童の知的年齢にあう内容を統合し、思考活動と相互文化・国際理解を促しながら、協同の学びを取り入れた実践的 CLIL 指導案作成し、それを取り入れた CLIL カリキュラムおよび教員養成・研修プログラムの開発を目的とする。

具体的には以下の3点を本研究の目的とする。

(1) CLIL カリキュラム開発の指針探究のための、海外での CLIL による外国語教育実践および教員養成プログラムの事例研究

(2) 1をふまえた日本の文脈に合わせた小学校外国語活動のための CLIL カリキュラム実現のための指導案開発。

(3) 1および2の成果を活用した、CLIL をとりいれた小学校外国語教員養成・研修の実施。

3. 研究の方法

(1) 海外での CLIL 事例研究

本研究に関しては、授業実践観察および教員へのインタビューを行う。具体的には、4Cs の観点からの授業実践分析を行い、また教員養成および教員研修プログラムについては、実践教員および大学の教員養成プログラムに携わる教員へのインタビューを行いその実態を調査する。

(2) 日本の文脈に合わせた小学校外国語活動のための CLIL カリキュラム開発のための指導案作成

(1)の成果をふまえ、日本の文脈に合わせた小学校外国語活動のための CLIL 指導案・教材開発を行う。具体的には、①CLIL 指導案および教材作成、②①をもとにした授業実践データ・児童の振り返りシート等をもとに、実践指導を行った現職教員と研究者と再検討を行い、日本の文脈をふまえた CLIL カリキュラム開発のための指導案を作成する。

(3) CLIL による小学校外国語教員養成・研修プログラム開発

(1)および(2)の成果をふまえ、CLIL 研修会・研究発表会を実施の上、アンケート調査を行い、その結果について KH Coder (樋口, 2014) により分析し、CLIL 教員養成・教員研修プログラムの開発を行う。

4. 研究成果

(1) 海外での CLIL 事例研究

海外事例研究視察は、2015年に行われた。CLIL 英語教育実践視察は、スペイン(バルセロナ1校)・イタリア(ミラノ2校)・ドイツ(1校)・フィンランド(2校)の計7校、また CLIL による教員養成プログラムに関しては、スペイン(バルセロナ1校・マドリード1校)、ドイツ(1校)、フィンランド(1校)でその実態について調査を行った。

CLIL 小学校英語教育実践視察結果

ヨーロッパの CLIL は、理科や社会等の科目教育を主目的として、そこに外国語教育を統合して授業実践が行われており、ハード CLIL とよばれるものである。本研究が目指す日本の外国語教育のためのソフト CLIL とは異なるが、その実践は、日本における CLIL カリキュラム開発に示唆を与えるものとなった。以下に4Csの観点からの授業分析結果

及び教員のインタビュー結果について示す。

①内容

内容は理科(人体のつくり・Solar system, Eco system), 社会(わたしたちの町とさまざまな職業, イタリアと日本), 音楽(楽器を使ったグループごとの音楽創作), 算数(お金の計算)の単一教科によるものと、教科横断型プロジェクトによる社会の地理的内容と理科の地学的内容を統合した地域学習など多岐にわたるものであった。

上記授業内容はさまざまではあるが、学習内容と言語の提示の際には、以下の多様な手法や教材を使っての Multimodal Input が考慮されており、共通点が見られた。

Demo (教師の例示) Hands-on activity
Realia Pictures Songs Gestures
Video Power Point PC

②言語

CLIL 授業における教師と児童の Interaction においては、教師が学習言語を活用しながら、児童の思考と発話を促す様子が見られた。具体的には、児童の思考を促す Elicitation や意見を発話させる際に学習言語を取り入れた言語フレームを与える具体的事例が観察された。

思考

児童の思考を促すために、教師の介入として着目したのは、教師の発問である。以下に児童の思考を段階的に促していたと観察された発問を、Anderson & Krathwohl により revised された Bloom's taxonomy に拠り、分類した結果を示す。

Lower Order Thinking Skills (LOTS) 発問

Remembering を促す発問

- We'll try to remember more things about the eco systems. Do you remember it, Yes or No? What do you remember?
 - What is this? • What's this called?
- Understanding を促す発問
- Give us an example.
 - What's the meaning of ~ ?
 - What is a peninsula? Can you explain?
- Applying を促す発問
- How does this work?
 - Let's think your ideas.
 - When is easier to live for them, summer or winter?

Higher Order Thinking Skills (HOTS) 発問

Analyzing を促す発問

- Why do you think of this?
 - Is this a natural creature or a human creature? Why do you think so?
 - We can immediately compare the figures or features of Japan and Italy.
- Evaluating を促す発問
- Do you have different opinions?
 - What do you think you have to do with these?

Creating を促す発問

- Let's create your music.

- Let's create our original planets next time using imagination and our study.

協学・文化

どの授業においても、協同学習(4, 5名によるグループ学習)が行われていた。その際、イタリアのミラノの小学校では、協同学習を開始する前に、グループ内での各自の役割(Leader, writer, 発表の際の Speaker)を明確にするよう、指示があり、児童はそれに従って各自の役割を決めた上で、協同学習に入っていた。また学習内容にもよるが、Eco System では ESD(持続可能な社会を考える教育)、地理学習ではイタリアと日本など、国際・文化理解を促す授業構成を重視していることが教員のインタビューから示された。

CLIL カリキュラム実践に関する教員とのインタビュー結果

今回の海外視察に協力頂いた CLIL 実践に携わっている教員の多くは、英語教諭として小学校教育に携わってきた教員であり CLIL 導入に際し、他教科との内容を統合した授業実践を始めたとのことであった。国も授業担当および授業数も異なるが、CLIL カリキュラムとその実践に関する優位点と困難点には以下の共通点があった。

優位点

- ①体験的・主体的言語学習の実現
- ②児童の発達段階にそう思考活動の実現
教師としてのやりがい

困難点

- ①指導案作成・教材準備
- ②言語教師と教科教員との協同
CLIL 教員研修

CLIL カリキュラムおよび教員養成・教員研修に関する大学教員とのインタビュー結果

本研究においては、スペインのバルセロナとマドリード、およびドイツの大学教員である。特に、バルセロナにおいては、実際の CLIL 教員養成プログラム授業に参加の許可をいただいた。プログラム内容の構成は、どの大学においても、以下の流れで行われていた。

- ①CLIL の基盤となる理論について
- ②CLIL 実践(ビデオ視聴/実践授業体験)

CLIL 指導案作成

全大学教員から指摘された CLIL 教員養成・研修においての大きな課題は、CLIL カリキュラムにおける指導案や教材の不足であった。これは、上記の CLIL 実践教員の指摘した困難点と同様である。

これらをふまえ、本研究では、以下の通り、日本の小学校外国語活動における CLIL カリキュラムおよび教育養成プログラム開発のため、日本の教育的文脈に合わせた CLIL 指導案の開発を行った。

(2) 小学校外国語活動 CLIL 指導案

本研究では、小学校の各発達段階を考慮し、以下の4つにわけ、指導案開発を行った。

小学校低学年における CLIL 授業実践指導案

①「動物・色」

絵本作り 国語・音楽・図工・体育統合
学習言語

動物と色に関する語彙。

What color do you like?

What animal do you like ~? I like ~.

思考(推測・共感・評価)

協学

友達が考えた様々な色の動物を認め合いながら、友達と協力したり一緒に考えたりして絵本づくりをする。

②「宇都宮動物園へ行こう」

遠足をいかした外国語活動

学習言語

動物と果物・野菜の名前, like, eat 動詞。

思考(推測・共感・評価)

協学・文化

班やクラスで活動し、動物も私たちと同じ生き物であり、動物園でエサをあげる際のルールやマナーをクラスで考え、楽しく触れ合うことの大切さを学ぶ。動物園にいる動物が、実は絶滅危惧種の動物がいることを知ったり、様々な気候に住んでいた動物たちであったりすることを知る。

小学校中学年における CLIL 授業実践指導案

「わたしたちの湘南の海」

理科・国語・図工・音楽との統合

学習言語

海のいきものと生息地に関する語彙

(fish, shrimp, starfish や sea 等)

Swim, walk, live, see, like の動詞

What do you see? Where do ~ live?

What do you like? You can ~ in Shonan.

思考(記憶・理解・応用・評価・創造)

協学・文化

グループ活動でコラージュを創作、それをあわせてクラスの創作物を協同で完成させる。自分の地域にすむ生きものや、地域のよい点について考え、それを地域を訪れる外国の方々に対して紹介する。

「オリンピック」

社会・体育・道徳「国際理解」

学習言語

色とスポーツおよび国に関する語彙,

What color/country is this? Who is this?

Can you play ~? What do we have in 2020?

思考(理解・推測・分析)

協学・文化

グループで、オリンピックシンボルマーク5色の色について What color is this? と聞きながら、その意味について考えさせる。それぞれの色が表していることを児童同士の協同学習により考えさせる。

最後にスポーツを通じて、5つの大陸がつながり合うことの意味を知らせる。

「世界の数字」

算数「円グラフ・世界の数字」社会・道徳
学習言語

Numbers (1 ~ 30), How many ~ ?
teachers, boys, girls, desks, books 等
思考(理解・推測)

協学・文化

数の英語を使って、世界の学校の現状を理解する。男女に分かれて別の活動を実施し、女子には教育の機会が与えられない国があることに気づかせ、自分たちがその国にいたらどんな気持ちかを推測し、教育の不平等について考える。

小学校高学年における CLIL 授業実践指導案

「世界の色・わたしの色」

社会「世界の国々」道徳「国際理解」

学習言語

色、季節、感情を表す語彙

What is this? What color is this?

What season do you like?

思考(理解・推測・分析)

協学・文化

グループ学習やクラスのディスカッションの中で、世界のポストの写真や季節を表す色について、世界の色に関する推測や分析を促す。そこで色のもつイメージについて、中国の季節のイメージを表す色について、推測しながら、国による色へのイメージの違いがあることを知り、文化の違いに気づく。最後に好きな季節を表す色について一人一人考え、クラス全員のお互いの個性や特徴を知り、認め合う。

「世界の国々 North America」

社会・道徳・音楽「世界の国々の音楽」

学習言語

America, gospel, 感情を表す語彙(happy, tired, hungry, sad など)

How do you feel? Are you happy?

思考(理解・推測・分析)

協学・文化

名所や旗などのヒントをもとにアメリカについてやりとりをし、アメリカの代表的な音楽として、5年生のときの「世界の国々の音楽」で学習したゴスペルを聴く。この歌で奴隷として連行された人々は、どのような気持ちで、ゴスペルを歌ったのかを考え、グループで話し合い、なぜそう考えたか理由とともに発表する。

「外来語について考えよう」

国語「外来語」社会「世界の国々」

学習言語

世界の国名と言語名(English, French 等)
~ is from 言語名。

思考(記憶 理解 分類 分析 創造)

協学・文化

グループ活動で、カタカナ語を分類する。外来語には英語圏だけではなく、世界の様々な外国から来ている語が沢山あることを認識する。海外に広めたい日本語について、グループで話し合っ、意見をまとめ、クラスで意見を共有し、発信するのに一番良いと思う言葉を決める。

「Meals and Healthy Life(食事と健康的な生活)」

家庭科「3大栄養素と調理実習」

学習言語

食べ物に関する語彙 (egg, rice, apple, cheese, shrimp, carrot, bread, oil, chocolate, potato, fish 等)

調理の際に必要な動詞 Put, wash, clean
思考(理解、分類、応用、創作)

協学・文化

食品を三大栄養素を理解し、分類し、栄養素の働きを理解し、栄養の整った献立を考える。それに基づき、適切な手順で調理の協同実習ができる。実習では、オーストラリアの食文化を知り、オリジナルクラッカーを創作する。

「貿易ゲームをして、世界に目を向けよう」

社会「世界の中の日本」

学習言語

資源や技術を表す文房具用品に関する語彙 (pencil, scissors, ruler, paper), money, What do you have? I have ~.

Can I have ~ ?

思考(理解、推測、分析)

協学・文化

本実践は「新・貿易ゲーム 経済のグローバル化を考える」(出典開発教育協会)を外国語活動用に関係したものである。グループごとの協同学習の中で、分けられた資源や技術を使って を生産し、不公平な貿易が引き起こす社会問題について考え、その解決策をクラスで共有する。

不公平な貿易が引き起こす社会問題、特に自分たちと同じ児童が労働力として安い賃金で働かされていることを知り、その解決策の一つとしてフェアトレードによる商品が流通されていることを知る。この授業をもとに、英語を使ったコミュニケーションを通して、世界市民としてどのようなことができるかを考える契機とする。

「シリアの子どもたちの声を聞こう」

社会「世界の未来と日本の役割」

学習言語

難民に関する語彙 (refugee, Syria, war, family),感情を表現する語彙(happy, sad)

日常の動作を表す表現 (go to school, eat dinner など) She can/can't ~.

思考(記憶 理解 評価 分析 創造)

協学・文化

グループ活動とクラスでの意見共有から、シリア難民の子どもたちの生活や夢を知る。その一人一人の立場に自分を置いてみて難民としての暮らしを想像し理解し、自分あたり前のようにできていることが、難民の子どもにはできていないことに気づく。社会の教科書の最後で学ぶ難民や国際協力の問題について関心を持ち、現在、世界で実際に起きていることに対して想像力を駆使して理解しようとし、自分に何ができるかを考えてみる。最後に、励ましのメッセ

ージを考え、よいと思うものを選ぶ。

「Let's go to the Easter Island!(イースター島に行ってみよう!)」

国語「イースター島にはなぜ森林がないのか」理科「生物どうしのつながり」

学習言語

自然に関する語彙(sea, sky, mountain, river, forest),生きものに関する語彙

(turtle, bass, red-back spider 等),

What can we do in the Easter Island?

思考(理解・記憶・分類・比較・創造)

協学・文化

学習言語を使ってイースター島でできることをグループで考える。情報誌の写真と見比べて、発表した内容が合っているかみんな確認する。イースター島にあるものもないものに区別する。データやグラフなどから地球環境について理解する。環境問題についてイースター島と地球とを照らし合わせて考える。地球市民として、自分たちにできることを考える。

小学校特別支援学級における CLIL 指導案

「好きな野菜はなに？」

生活科「野菜をそだてよう」

学習言語

野菜に関する語彙 (potato, tomato, carrot, corn, broccoli, onion)

What is this? It's ~.

Do you like ~? Yes/No.

思考(理解・推測)

協学・文化

野菜の飲み物を用意して、授業に対する児童の興味関心を高める。自分たちが育てている野菜の写真から始めることで、野菜に関する語彙の学びを促す。野菜の苗あてクイズを行い、野菜の語彙を使って推測を促す。同じ野菜でも外国の野菜は大きさや形が異なるなど、食文化理解にも繋げる。多様な児童の特性に配慮して、味覚、触覚、視覚、聴覚など、多感覚を意識した授業を行う。協同学習が難しい児童については、カードを個別に与えて配慮を行う。

(3) CLIL による小学校外国語教員養成・研修プログラム開発

(1) および(2)の研究成果をいかして、CLIL 実践を目指す大学生、および現職教員を対象として、平成28年に宇都宮大学にて、また平成29年上智大学にて、小学校 CLIL 実践の指導内容および指導方法について、本研究成果をいかした CLIL 研修会および研究発表会を行った。プログラムは以下の4つで構成した。①CLIL の基盤となる理論、②CLIL 実践についてのビデオ・もしくはワークショップ、CLIL 指導案および具体的な教材の提示。 質疑応答。参加者は大学生87名、現職教員、ALT等小学校外国語教育指導者等を含めた175名、計262名が参加した。その際、プログラムの意見・感想についてア

ンケート調査を実施し、全記述をKH coder にかけた結果、①英語・児童・興味・実態・教科、②学校・世界、③心・育てる・深い・学び、の抽出語が強い繋がりあるグループとして示された。さらに 今後・いかす、 大変・参考という抽出語のネットワークも示され、CLIL プログラムが今後の日本の小学校外国語教育において効果的な指導方法となる可能性があることが明らかになった。

まとめ

本研究は「外国語活動における CLIL を活用したカリキュラム及び指導者養成プログラムの開発」と題し、日本の小学校での CLIL の活用による効果的な外国語学習における「指導内容および方法」の具体的な方策の探究を目的としたものである。

実際に CLIL の根幹にある 4 つの要素、言語・内容・思考・協同学習/相互文化理解を取り入れ、さまざまな文脈での CLIL 授業分析実践研究を行い、それをいかした指導案開発および研修会を行った。本報告書はその成果をまとめたものであり、これにより小学校初學者レベルの平易な言語であっても、内容とともに思考も深化していく英語教育の実現を、日本の文脈でどのように実践するかについての指針を示すことができたと言えよう。

最後に、本研究成果をもとに、日本における CLIL の可能性と課題を以下にまとめる。

まず可能性については、①学習者の知的発達と興味にそう内容による言語学習への動機付けの高まり、②意味あるコンテキストの中での、学習言語のインプット、思考を促す発問を通してのインタラクションおよびアウトプットの促進、 意義ある内容での思考活動および国際的課題等による協同学習の促進、 英語教育における小学校教員の他教科知識の活用、 指導者に英語教育に対する新たな視点を提供し、よりよい授業実践を考える契機となりうる、という 5 点である。また今後の課題としては、①CLIL を取り入れた新学習指導要領を考慮した教材開発とその評価方法の探究、②上記小学校外国語教育における CLIL 実践の学びを中高の英語教育と繋ぐ研究の必要性があげられた。特に②の課題は、今後の日本の英語教育の課題としても過言ではない。

新学習指導要領においては小学校のみならず、中学校・高等学校外国語教育においても外国語教育と他教科との学びの活用や関連付けの工夫が必要と示された。言語の学びを本物の内容と繋げながら、学びを深め、活用する実践授業研究は今後ますます必要不可欠なものとなることが考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 34 件)

山野有紀, 笹島茂, 金森強, 池田真, 坂本ひとみ他「外国語活動における CLIL を活用したカリキュラム及び指導者養成プログラム開発」2014 年度～2017 年度 科学研究助成補助金基礎研究(C) 課題番号 26370723 研究成果報告書、2018 年

②山野有紀「小学校外国語活動における CLIL 実践と可能性 公立小学校における事例研究」、国際教育研究要綱、21 号、2015 年、査読有、pp. 81-90

Yamano, Y., Exploring the cognitive change of an elementary school teacher through CLIL practices、宇都宮大学教育大学紀要、65 号、2015 年、pp. 205-219

他 31 件

〔学会発表〕(計 62 件)

①山野有紀、滝沢麻由美、蒲原順子、ヨロツパの小学校における CLIL - CLIL 先行事例からの示唆、第 15 回小学校英語教育学会広島大会、2015 年 7 月、広島大学

②Yamano Y., Exploring CLIL potential for primary EFL education in Japan、International CLIL conference、2014 年 8 月、カフオスカリ大学 Venice, Italy

他 60 件

〔図書〕(計 4 件)

Tanner R., & Ikeda, M., Mini CLIL Skills, 2015 年、上智大学、54

他 3 件

〔その他〕

ホームページ：CLIL Japan Primary
<http://primary.cliljapan.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山野 有紀 (YAMANO YUKI)

宇都宮大学 教育学部 准教授

研究者番号：10725279

(2) 研究分担者

笹島茂 (SASAJIMA SHIGERU)

東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授

研究者番号：80301464

池田真 (IKEDA MAKOTO)

上智大学 文学部 教授

研究者番号：10317498

金森強 (KANAMORI TSUYOSHI)

文教大学 教育学部 教授

研究者番号：90204544

坂本ひとみ (SAKAMOTO HITOMI)

東洋学園大学 グローバル・コミュニケーション学部 教授

研究者番号：10205776